龍谷大学アジア仏教文化研究センター　ワーキングペーパー
No. 10-02（2011 年 1 月 31 日）

トルファン研究所所蔵ウイグル語写本調査報告

橘堂　晃一
（龍谷大学アジア仏教文化研究センター博士研究員）

【キーワード】：ウイグル語写本・トルファン研究所・唯識文献

8月下旬から9月上旬にかけてのベルリンの気温は，35度以上の猛暑日が続いたサウナのような京都に比べると，15度前後と予想を超えて低かったが，寒いというほどのこともなく，秋の気配を感じさせる心地よい気候であった。今回の訪問先であるトルファン研究所は，ベルリン・ブランデンブルグ科学アカデミー (Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften) の研究部門の一つである。科学アカデミーは，ブランデンブルグ門のほど近く，イェーガー通りに面している。通りを一つ隔てた広場にはフランス教会 (Kirche der französischen Gemeinde Berlins) がある。かつてこの教会にボーソブル神父 (Isaac de Beausobres：1659-1738) がいた。彼はここでマニ教の研究に従事し，ユグノー・コミュニティーを擁護すべく『マニ教とマニ教徒の批判研究史』 (*Histoire Critique de Manichée et du Manichéisme*, Amsterdam, 1734) を著した。彼が「マニ教研究の父」と呼ばれる所以である。1997年にはここで第4回マニ教国際学会が開催されている。まさにマニ教資料を数多く所蔵するトルファン研究所の所在地としてふさわしい場所といえる。



トルファン研究所は，科学アカデミー2階の一角に研究員の研究室と文書保管庫とを構えている。建物内にはパタノスタ（Paternoster：数珠）と呼ばれる自動昇降装置とでもいうべき箱が絶えず稼動している。この装置はその名の通り，ドアの無い箱がいくつもワイヤーロープに取り付けられていてゆっくりと昇降するという代物である。実際に入り口の前に立つと，床下から箱がゴトゴトと音を立てながらゆっくりと上がってくる。初めて乗るのは結構勇気がいるもので，もし箱と天井に挟まれたら…，降りそこなったら…，などと余計な心配をしてしまった（もちろん戻って来ます）。旧東ドイツ時代の名残であるそうだ。そういえばベルリン市内の信号機にも東ドイツ時代デザイン（アンペルマン）が利用されているのをよくみかけた。なんでもかんでも西の方が良いということではなく，東時代のものも積極的に残していこうとしているのだそうだ。

トルファン研究所の名称は，中国新疆ウイグル自治区のトルファン盆地に由来する。

20 世紀初頭，グリュンウェーデル (A. Grünwedel) とルコック(A. von Le Coq) を隊長として都合 4 度に渡って派遣された探検隊は，新疆の西域北道沿いのオアシスにおいて多くの遺跡を発掘した。とりわけ最大級の成果を挙げたのがトルファン盆地であった。龍谷大学の大宮図書館のエントランスの両脇で我々を出迎えてくれる誓願図も，もとを質せばトルファンのベゼクリク千仏洞でルコックが採取した壁画をもとに復元したものである。

彼らが発掘した成果は，壁画のみならず多種多様な文書も含まれる。ルコックによれば，17 種類の文字と 24 種類の言語に分類できるというが，近年はさらにその数を増している。その内容を宗教文献に限っていえば，仏教，道教，儒教，マニ教，ネストリウス派キリスト教と多様である。いうまでもなく仏教文献がそのほとんどを占めている。現在，漢文文献はベルリン国立図書館 (Staatsbibliothek zu Berlin) に保管されている。龍谷大学西域文化研究会とトルファン研究所とは，1965 年よりこれら漢文仏教文献のカタログ化について共同研究を継続している。その成果は 3 冊のカタログに結実している（4 冊目は準備中)。またそこで得られた経験は，旅順博物館に所蔵される大谷探検隊がトルファンから将来した漢文文献の整理にも大いに活かされた。

さて，このたび報告者がトルファン研究所を訪問したのは，ウイグル語文献を閲覧するためであった。9 世紀にモンゴルの故地を追いやられ，天山山脈の東麓に逃れてきたチュルク系ウイグル族の一派が西ウイグル国を建国した。その後，その国はカラ・キタイやモンゴル帝国に帰属しつつ 15 世紀まで存続する。彼らの社会生活や信仰を伝えてくれるのがウイグル語文献である。当初はマニ教を信奉していた彼らだが，やがてトルファンでマジョリティーであった仏教へと改宗していく。仏教と一口にいっても，ウイグル語で書かれた仏教文献はその内容からスタイルにいたるまでバラエティに富んでいる。そのなかで報告者が注目しているのが，Lehrtext すなわち「教義書」と分類されるウイグル語文献の一群である。これまで何人かの研究者が解読を試みてきたが，誰も成功していない。インターネットで公開されているデジタル画像をもとに行った事前調査により，これらの文献が法相宗にかかわる唯識文献であることを突き止めた。その総数も当初の予想を超えて，小さなものまで含めると，約 200 断片に及ぶ。今回の調査では，デジタル画像からは文字が不鮮明で読めない断片を中心に解読作業を進めた。さすがに生の資料から得られる情報量はデジタル画像とは比べ物にならないほど豊かで，研究を大いに進展させること

ができたと同時に，新たな関連資料を見出すことができた。わずか 5 日で約 130 件の資料を閲覧したのだが，通常 1 日に 10 件ほどが閲覧申請できる目安だそうである。規定に倍する件数の閲覧を許可してくださった研究所の研究員・スタッフ，とくに手間のかかる写本の出し入れをしてくださったジモーネ・クリスティアーヌ・ラシュマン博士そして笠井幸代博士にこの場を借りて感謝の意を申し述べておきたい。

ちょうど同じ期間，大阪大学大学院教授・森安孝夫博士もトルファン研究所を訪問されていた。博士は「ウイグル語手紙文書集成」を執筆中と伺った。ウイグル語手紙文書は仏典と異なり，文書の保存状態も悪く，文字も判読しづらいものがほとんどである。丁寧に書写された読みやすいウイグル語仏典を次から次へとチェックしていくだけの報告者と違って，一件の文書に十分な時間を取って，真摯に，そして粘り強く解読に取り組んでおられる姿が印象的であった。また実物をみながら，紙の色や紙質そして手紙文書の書式について解説してくださったことも得難い経験となった。

滞在のちょうど中間日には，研究所が報告者に発表する機会を与えてくださった。Collegium Turfanicum という不定期的に開かれる研究会であるが，その 52 回目であった。今回は Sino-Uigurica (1) というテーマで，ウイグル人によって書写された漢文の礼懺文について紹介した。ウイグル語の資料だけがウイグル仏教を物語るものではない。すでに知られているところではサンスクリット，チベット語，ソグド語などもウイグル仏教の研究に不可欠である。ウイグルは後期になると中国仏教の強い影響を受けるようになった。そこで紹介した漢字資料もそのことを物語っている。報告に対しては，ペーター・ツィーメ博士から多くの有益な指摘をいただいた。

今回の訪問は短期間ではあったが，ウイグル語の仏典資料を通して中央アジアの仏教の多様性を再認識するとともに，それらが同時代の中国仏教の在り方をも反映しているという事実から，ウイグル仏教資料としてだけではなく，中国とくに敦煌地域の仏教事情を反映した資料としての価値も持っていることを強く印象づけられる調査となった。この度の調査で得られた知見とヒントを，東アジア仏教のダイナミズムを把握していくための一つの方向性として，今後の調査・研究に活かしていきたいと考えている。